

高山の文化を高めた人々(11)

尺八の 林 逸 樹

吉野 三郎

大正十年、高山に逸友会琴古流逸童派が誕生しました。

この会の誕生には故林逸樹先生の尺八に対する研究と並々ならぬご努力がありました。

江戸時代には、尺八を法器と言って武士と僧以外は持つことを禁じられていました。明治の初め、林逸樹先生の師匠である吉田一調師は何とか民間人も尺八を奏することができるよう、法器から楽器へ変更の許しを得るよう努力され、その甲斐あって、庶民が奏する事が出来るようになった。

林先生は、尺八のみならず、箏三曲の指導にも努力され、当時、門下生は尺八百人、箏五十人も聞いています。

先生の高山での活躍の中で特に注目したいのは、昭和の初め頃、高山の長唄会、岩下社中と高山音楽連盟と共に三者合同して和洋合奏「長唄越後獅子」を

演奏された事です。五十名以上の大合奏は素晴らしい出来ばえでした。

東京においても思い出の演奏がありました。

「長唄越後獅子」の演奏を終えて上京された先生は三曲の宗家米川家を訪ねられ、その折、米川師匠は林先生の才能を高く評価され、能楽堂にて三絃合奏を提案されました。普通では出来ない米川師匠との三絃合奏が能楽堂において実現しました。

高山における先生の活躍は、広く飛騨地区の箏、三絃、長唄の諸団体と共催して各地で演奏会を開かれました。高山市公会堂での演奏会では、演奏場の階下から見ると二階の床が丸く下がりが、管理人が慌てて入場をストップした程の大入りでした。

演奏曲は宮城道雄の「秋の調べ」、邦楽の世界に洋楽の要素を取り入れたカノン風の曲は、今までの三曲演奏に新風を吹き込み、短管の尺八、箏、尺八との旋律が絡み合う美しさは見事なものでした。逸友会を誕生、発展させ、市民に三曲演奏の楽しさを普及させた林逸樹師匠は昭和十六年六月二十日、四十八歳という若さにて逝去されました。

